

御花畑役秘帖

返り咲き三左

山田剛



より咲き

三左

御花畑役秘帖

常州大学図書館蔵

山田剛

学研M文庫

かえ ざ さん ざ お はなばたけやく ひ ちょう
返り咲き三左 御花畑役秘帖

やま だ たけし
山田 剛

学研M文庫

2013年4月23日 初版発行

●
発行人——協谷典利

発行所——株式会社 学研パブリッシング

〒141-8412 東京都品川区西五反田2-11-8

発売元——株式会社 学研マーケティング

〒141-8415 東京都品川区西五反田2-11-8

印刷・製本——中央精版印刷株式会社

© Takeshi Yamada 2013 Printed in Japan

★ご購入・ご注文は、お近くの書店へお願いいたします。

★この本に関するお問い合わせは次のところへ。

・編集内容に関することは——編集部直通 Tel 03-6431-1511

・在庫・不良品(乱丁・落丁等)に関することは——

販売部直通 Tel 03-6431-1201

・文書は、〒141-8418 東京都品川区西五反田2-11-8

学研お客様センター『御花畑役秘帖 返り咲き三左』係

★この本以外の学研商品に関するお問い合わせは下記まで。

Tel 03-6431-1002 (学研お客様センター)

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

本書の無断転載、複製、複写(コピー)、翻訳を禁じます。

本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内の利用であっても、著作権法上、認められておりません。

複写(コピー)をご希望の場合は、下記までご連絡ください。

日本複製権センター TEL 03-3401-2382

<http://www.jrrc.or.jp> E-mail: jrrc_info@jrrc.or.jp

Ⓔ 〈日本複製権センター委託出版物〉

目次

第一章	江戸へ	5
第二章	葵の風	69
第三章	国替え	129
第四章	襲撃	196
第五章	逆転	266

べり咲き三左

御花畑役秘帖

山田 剛

学研M文庫

本書は文庫のために書き下ろされた作品です。

目次

第一章	江戸へ	5
第二章	葵の風	69
第三章	国替え	129
第四章	襲撃	196
第五章	逆転	266

第一章 江戸へ

一

三左衛門^{さんざえもん}は川面にたゆたう〈寝かせ浮き〉を睨みつけていた。

白髪頭で額が広く、腰に脇差^{わきざし}のみを帯びていることから、隠居だとわかる。

三左衛門は、「釣り糸を垂れる^た」という言い方が嫌いだ。気に食わない。

傍目^{はため}には、のんびりと釣り糸を垂れているように見えるかも知れない。しか

し、釣り人は、魚が餌^{えさ}に食いつくのをただ待ち続けているわけではないのだ。

常に風の向きや川の流れを読みながら、

「来るか、来るか、さあ来い」

と、それこそ釣り竿^{ざお}を握る手に、研ぎ澄ませた神経を送り込んで、魚と闘っているのだ。

釣りとは、そういうものだ、と、三左衛門は考えている。

だから、己のような〈せつかち〉な性分の者にこそ、釣りは向いているのだと信じている。

とはいふものの、空はどこまでも晴れ渡り、青い水面みなもが撥ね返す優しい光に眠気を誘われて仕方がない。

さきほども、ふっと、自身の身体が流される錯覚に襲われた。

闘っている相手は魚ではなく、実は睡魔だった。

（何かせねばと致す釣りなど、面白くもないものよ……）

欠伸あくびを噛み殺しながら、心の内でこう呟いた初老の男、峠三左衛門とうげを仲間内の者は、親しみを込めて〈三左さんざ〉と呼ぶ。

隠居して、やっと、三年が過ぎた。千日を越す退屈な日々が、川の流れの彼方かなたに消えた。

釣りも根っから好きではないのだ。芯から好きな者は、竿さおにこだわりの仕掛けに凝り、浮きや餌にもこだわる。川か海か岩場か、それぞれに一家言持っている。語り始めれば尽きることなく喋り続ける。それが道楽を極めることであり、好きということだろう。

三左衛門は違った。御役目あつての道楽なのだ。御役目が忙しく、充実して

いればこそ、寸暇を惜しんで釣りをするから楽しいのだ。

(来た)

魚信ぎょしん、当たりがきた。

重たくなつた両の脛まふたを見開いて、竿を握る手に神経を集中させた。

その時——がさがさつと、草叢くさむらを踏み鳴らす音がした。

気持ち途切れさせるがさつな音に、三左衛門は顔をしかめた。

足音の主は、にと愛想笑いを三左衛門に向けた。

気が殺そがれた次の瞬間、当たりが消えた。

三左衛門はむっと口をへの字に曲げて、釣り糸を引き上げた。糸が切られていた。

男は三左衛門の穏やかならぬ心中などお構いなし、にこやかな顔で釣り糸を川に投じた。

「目に見ゆるものは皆涼し。隣は何をする人ぞ」

あつけらかんと諳そらんじたこの男、名を海老原庄兵衛えびはらしやうべえと言い、三左衛門と同じ隠居の身である。

三左衛門は元御花畑役おはなばたけやく、百石。御花畑役とは、普段は城内や藩主の邸宅の庭

の管理をするのが主な御役目だった。

一方の庄兵衛は元納戸役なんどやく、八十石。三左衛門と同年である。

御役目こそ違うが、家格は似たような下級武士、若い頃は同じ町道場に通う剣友だった。今一人、江戸詰の男とともに、道場の三羽鳥さんばがらすと呼ばれて、藩内にその名を轟かせたこともあった。だがそれも、今は昔、である。

二人がこの場所に陣取っているのは、ここが、魚が集まる場所だからではない。魚が集まるのはむしろ対岸、川の東岸である。三左衛門と庄兵衛も以前は東岸にいた。

「——向こう岸に行かぬか」

隠居して一年が経とうとしていた頃だったか、三左衛門が、ぼつりと口にした。

東岸に立てば否応なく御城の二層の天守閣てんしゅかくが見える。それが堪らなく嫌になったのだ。

三左衛門の言葉の意味合いをすぐに解したのか、天守閣を睨むようにして釣り糸を垂れていた庄兵衛が黙って応じた。

西岸に移った結果、御城を背にすることになり、波立つ気持ちはいくらか収

まった。だが、釣果は減って、家に帰ると妻の眼が冷ややかになった。

笛木桜井家、二万三千石は、三河の海に面した小さな藩である。南北に細長く広がる肥沃な土地と豊かな森林資源、加えて温暖な気候にも恵まれて、藩の財政は裕福だった。

御領地の西側に隣接するのが、御三家筆頭の尾張徳川家である。

三左衛門ら釣り人が集うこの川は笛広川ふえひろがわと言い、御領地の北部に連なる豊かな山林地帯に源を発して、満々と水を湛え、ゆるやかに蛇行しながら御領内のほぼ中央を南北に縦断して海に出る。

「聞いたか三左」

庄兵衛が口を開いた。唾が頬に飛んで来た。

「島田の三男坊がご家老の末娘を嫁にするそうじゃ、道理でこの間、道ですれ違った折に、笑いが止まらぬ顔をしておった。まるで再出仕でも決まったかのような物言いであつた」

と、悔しげに言い放った。

庄兵衛は御家の事情や噂話を大いに好んだ。藩の人事から冠婚葬祭、商家の一人娘を孕ませた相手の男の名前や隣家の借金の高まで実に詳しい。いくら煙

たがられようと元の職場の同僚を捉^{つか}まえては、日々、新たな報せを掻き集めていた。

この日の庄兵衛も、飽くことなく御家の事情を喋り続けている。

しかし、こう毎日毎日、傍らで聞かされれば、三左衛門もさすがにうんざりして、相槌もおざなりになる。

庄兵衛もそれは敏感に感じていて、昨日などは、

「——おぬしと話していても、つまらん」

と悪態をついて帰って行った。ならば、三左衛門の隣になど並ばねばよいと思うのだが、何事もなかったかのように、いけしゃあしゃあと顔を見せたので、三左衛門も癢^{しやく}にさわったのだ。

どうせ時をつぶしておるのだ、と三左衛門は看破している。

御家の事情や報せを掻き集めたくとも、現役は皆、城中だ。彼らが下城するまでは動きようがない。だから釣りをしているだけなのだ。その様は、まるで、寺子屋に通わせてもらえぬ悪童が、遊び仲間の帰りを待つかのようだ。

要は、庄兵衛は再出仕がしたくて、うずうずしているのだ。その気持ちは三左衛門にも充分酌み取れた。三左衛門とて、日々の暮らしに張りがあるとは到

底言えなかつた。出仕を望むか望まぬかと問われれば、望んでいると答えざるを得ない。

「見ろ」

庄兵衛が空翔^{かけ}る鳩^{はと}を指差した。

「御城に向かつて飛んでいく。何かあつたのだ」

庄兵衛は釣り道具の後片付けももどかしく、背丈の伸びた草に足を取られながら、まるで餌を求める鳥の如くばたばたと帰っていった。

いま釣りをしている笛広川に沿って上流に向かうと、御城の北側に主に下級武士の住まう武家地が広がる。三左衛門の家はその一画にある。正しくは、家督を譲った息子夫婦の屋敷の離れに、妻と母の三人で暮らしている。

屋敷の程近くに木材の集積場がある。山林から伐^きり出された木材は笛広川の上流から流されてその集積場に保管されていた。

鳩を見かけた翌日。

三左衛門は、白い鉢巻きに目隠しをして、二人の孫娘と「鬼さんこちら」で遊んでいた。

三左衛門は、子供の躰しつけには内も外もなく厳しい。

孫が「薬が苦い」と言えば、「良薬は口に苦し。飲めるように努めよ」と言う。

道を歩いているときも、「前を見て真つ直ぐ歩け」「年寄りには道を譲れ」「他人には、はきはきと挨拶を致せ」と口喧やかましい。

それでも孫たちは三左衛門が好きで、「爺じいじ」と慕っている。

嫁の良いところは、三左衛門の躰しつけに関して一切口出しをしないことだ。

一度だが、こっそり菓子を買ひ与えたことがあつて、その時ばかりは「甘やかさないでくださいまし」と、ぴしやりと言われた。以来、孫に菓子を買ひ与えることはしていない。

「ご隠居様、御城からのお使いでございます」

廊下で嫁の佐保さほの声がした。

「御城から」

三左衛門は目隠しを取ると小首を傾げた。

「はて」

急ぎ、上り口に出て行くと、使いの若い武士が立っていて、三左衛門の姿を

目にとすると、礼儀正しく会釈^{えしやく}をして姓名を名乗った。

「峠三左衛門様、城代家老、梶山様^{かじやま}のお言葉をお伝え申し上げます」

城代家老の言葉と聞き、三左衛門は居住まいを正すように背筋を伸ばした。

「三左衛門様には直ちに登城せよとの御言伝^{おことづて}にございます」

「登城、とな。ご家老がそれがしに登城せよと、左様に仰せか」

「はい」

「御用の趣、確かに承^{うけたまわ}った。直ちに支度の上、登城致す。ご家老には左様に

お伝え願いたい」

「はっ」

「ああ、使いの御方」

一礼して引き返す若い使者を呼び止めた。

「ご家老はそれがしに何か持参せよとは仰せられませんでしたか」

「いえ、特に御言伝はございません」

「左様か……」

些^{いささ}か拍子抜けするが笑顔を取り繕い、その姿が見えなくなるまで使者を見送ると、急いで部屋に取って返した。